RosyTime

Mai=Rosegothic

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＲｏｓｙＴｉｍｅ

【Ｎコード】

Ｎ９３２６Ｋ

【作者名】

Ｍａｉ＝Ｒｏｓｅｇｏｔｈｉｃ

【あらすじ】

『ひぐらしのなく頃に』を全く別の世界で表現してみました。

プロローグ（前書き）

早い話、『ひぐらしのなく頃に』のパロディです（；＾＿＾Ａ

ただ舞台や世界観、登場人物は変わっているので楽しんでくれたら幸いです（＊＾＿＾＊）

プロローグ

…そうだ。

全ては私の後悔から始まった。

……

あの時、私が仲間を裏切らなかったら…　どうなっていただろうか。

あの時、私が気をしっかり持っていれば　どうなっていただろうか。

たびたびこんなことがある。

ああ！もどかしい！

もう、眠ろう。

…今度はどこにいきつくのだろうか。

わからない。
ただ私はそこで“執行”するだけ。

また始まる。

全意識を眠りへと、集中。
早く寝よう。
そうしないとまた彼女が来てしまう。

彼女はきっとこんな私を見たらくすくすと笑うだろう。　いつものように。

でも私は笑い声を聞きながらただ謝ることしかできないのだ。

かつての仲間たちに。

ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい　ごめんなさい…。

登場人物紹介

☆氏名（ふりがな）
好きな色　血液型
性格
特技
の順で紹介していきます。

★吉田美來（よしだみらい）
好きな色：緑　血液型：O
性格：いつも能天気でおっちょこちょい。天然ボケ気味。だけど意外に芯は強く、言いたいことははっきりと言う。成績は下の下。
特技：初対面の人でも話せる。

★森岡梨菜（もりおかりな）
好きな色：青　血液型：A
性格：リーダーシップがあり、みんなをまとめられる。しっかりしているが故、常にクラスではツッコミ役。少し厳しいが、仲間を大切に思っている。成績は上の上。
特技：バイオリン

★大原夏花（おおはらなつか）
好きな色：黄　血液型：B性格：いたずらっ子で美來をターゲットにアクション系のイタズラを働いている。運動神経がかなり良く、

スポーツをやらせたら何でもできる強者。基本男子が嫌い。成績は下の中。
特技：ハイキック、回し蹴り。

★伊藤朱里香（いとうじゅりか）
好きな色：赤　血液型：O性格：口数が少なく、要点だけを述べるタイプ。夏花と組んでよくイタズラを働く。トラップ系のイタズラを好んで仕掛ける。口数が少ないせいでクールに思われがちだが、実際はほとんど寝ているだけである。成績は上の中。
特技：トラップ、５秒以内に寝れる。

神永舞（かみながまい）
好きな色：黒　血液型：ＡＢ性格：マイペースで普段はそこまで目立たないが、言いたいことはズバズバと言う。欠点もズバッと言う毒舌家。たまーにアンニュイになる。成績は上の上。
特技：人の心を読み取れる。

☆以上の５人がこの作品の主要人物になります。
なお、他の人物は文中で紹介していきますので読んでるときにいきなり作者が出てきても「チッ…なんだよウゼェな…。」とか思わないでやって下さい（，；ω；，）
では、登場人物の紹介を終わります。

“believe” part 1（前書き）

いよいよ本格的に物語スタートです。
（二次創作と言っても、多少変えすぎた部分もありますのでご了承ください。）

“believe” part 1

…

…………

………ピピ……ピピピ…

ピピピピピピピピ…

「ああっもううるっさい！！」

そう叫びながら目覚まし時計を止める。
…まぁ１０割早く起きなかった私が悪いんだが。
私は吉田美來。栄凜学園に通う小学６年生です。この学園は寮制だからお母さんとお父さんにはなかなか会えないけど、私はいつもどおり超元気です！なぜなら…
ピンポーン
「はい、なぁに…」
「み〜ら〜い〜…。…遅いっ！！」
「今日はちゃんと目覚まし時計の音で起きたんだよー。８：３０にセットしたやつだけど…」
「まず根本的な何かが違うだろ！一応言うけど、目覚まし時計の音で起きても時間が遅ければダメだからね！？」
「（゜Д゜）」
「何その驚いた顔！こっちが驚くっつーの！！つーか知らなかったのかよ！」
この子は森岡梨菜。私の友達の一人でいつもみんなのツッコミ役な

の。口調は厳しいけど仲間を思ってのこと…だと思う。
――――――
「とりあえずもうみんな待ってるから行くよ！」
「あ、待ってよ〜。」
――
――――廊下――――
「美來ーっ！早くー！」
「も〜。梨菜〜慌てたって何もいいことないよ〜。」「お前のせいだろうが！！お・ま・え・の！！」
その時！私の足元に何かが引っ掛かる！これは…ワイヤー！？
そして・・・「わーーっ！！」
ズシャーッ
「いたた〜（泣）。」
パチパチパチパチ
「いや〜予想通りすぎる見事な転びよう。ありがと美來。」
「も〜。ひどいよ夏花〜。」
この子は大原夏花。梨菜と一緒で私の友達の一人。さっきみたいに私にしょっちゅうイタズラしてくるの。なんでだろ？
「それは美來が学習しないからだろ。」
「わっびっくりした〜。朱里香〜急に出てきて心の中のぞかないでよ〜。」
「顔に出てた。」
この子は伊藤朱里香。この子も私の友達の一人。基本無口だけど、夏花と一緒にイタズラしたりするよ。二人のトラップワークが合わさると、もう誰にも止められないよ（汗）
ここで梨菜が口を開く。
「やばいよ！舞を待たせてること忘れてた！急げー！！」

――――

「ハァ、ハァ、ごめん舞！待った！？」

「その様子だと、美來が寝坊して、梨菜に怒られて、夏花と朱里香のイタズラに引っ掛かったんでしょ？」「全くもってその通りだ。」

「だいじょうぶだよ。別に『遅刻したらてめぇらのせいだからな…』とか思ってないから。」

「「「すいませんでした。（土下座）」」」

「ほら行こ。早くしないと本当に遅刻になっちゃうよ？」

「そうだった！急げ！ダーシュ！！」

あ、そうそう。この子は神永舞。やっぱり私の友達の一人。私達とは何か違う上品でありながら、ミステリアスなオーラを放っている子。さっきみたいにたまに見せる性格が超怖かったり…。

私が両親のいないこの生活の中で超元気でいられる理由、それは…この個性的すぎる仲間たちがいるから。

私の楽しい生活はこの仲間たちなくしては成り立たないのです。

「…………。」

笑んでいる彼女の横でそれを哀れみ混じりの目で見ている者がいた。

何故なら――彼女、吉田美來はこれから起こる無情かつ、悲惨な出来事を、知らないのだから。

“believe” part 2（前書き）

更新かっなーり遅れてすいませんでしたァァァ!!

次回から気をつけます。

といって反省しないのが、この俺↑（殴

“believe” part 2

「薔薇祭ってさぁ、何だっけ？」
美來の口から発せられた言葉だ。
それに梨菜が対応していた。
「今年ももうそんな時期だー。ホント、早いよねー。っていうかさ…あんた…五年もこの学園にいるんだからしっかりしなさいよ――――――――っつーか…」
「今授業中なんだけどォォ！？」
「ほぇ？」
「『ほぇ？』ではなくて！先に話を切り出したのはあんたでしょうが！！」
梨菜の声が耳にキーンと響く。
「梨菜ぁ〜。梨菜も授業中ってこと忘れてない？」
「うるさい！」

「はーいそこ。ぎゃーぎゃーうるせーんだよ。今授業中ってこと分かってねーだろ。あ？」

小説をお楽しみ中すいません。作者です。キャラの紹介をさせてもらいます。

…間違いのないよう表記しておきますが、この人はヤンキーでもヤクザでもないです。
このクラス、6年G組の先生、藤崎先生です。いっつもやる気がなさそうでまるでどっかの白髪頭にそっくりです。一応は女です。
どうもすいませんでした。本編に戻ります。

「だって先生美來が…。」「だって先生梨菜が…。」「そうか。んじゃ、その間をとって八崎ィ！お前をチョークデッドボールの刑に処する！」
「えええええ！！俺一切関係な「せいやァァァ！！」ズドーーーン
「ほげらァ！」

……とりあえず謝っとく。ごめん。八崎。
後で給食のコーヒー牛乳おごっとこう。

「…お気の毒様。」
夏花が呟いた。

――――休み時間――――
「んで？薔薇祭って？」
美來が尋ねた。
「まだ思い出してなかったの！？」
と、梨菜が言う。
そこへ舞
「こういうのは読者のみなさんは分かってないだろうと思うから、美來が振ってあげなきゃ説明できないからね。」
「あんま生々しいこと言うな！お願いだから！」
「…コホン、薔薇祭って言うのはこの学園のシンボルの薔薇の花弁を屋上から降らす祭のこと。出店とかもあって結構楽しかったじゃん。」
「そういえば今急に今までの薔薇祭のこと思い出したような…」

「ご都合主義ね」
危ないセリフはすべて舞
「…えーと、今年は5人で祭を楽しめそうね。」
これ以上美來と舞が喋ると変な方向に話が進みそうなので割って入る梨菜
「わーい！じゃあ今度は5人でかき氷の早食いとか、綿菓子の早食いとか、たこ焼きの早食いとかできるね！」
「いや食いすぎでしょ！　」
「じゃあ金魚の掴み取りとか？」
「死ぬ！金魚死ぬ！てゆうか夏花、いきなり出てきて突っ込ませんな！」
「呼ばれてないのにジャンジャジャジャン！それがこの夏花さまなのだー！！」
「少し黙れ！お前！」

「そういえば…」
このメンバーで集まってたら、空気的に朱里香もいるはずなんだけど…

「ね〜梨菜、朱里香は？」「あれ？夏花、朱里香知ってる？」
「あるぇ〜？さっき一緒に来たのに───あ、あっちにいるよ〜。」
そういって夏花が指差したのは私達と真逆の方向にある窓際の机でスヤスヤとご就寝中の朱里香だった
「「「おいィィィ！」」」
ま、そんなこんなで5人で一緒に薔薇祭に行くことになった。
あ〜今から楽しみ〜っ！！

ウキウキしてる私と反対に何故か退屈そうな舞がいた。
「どーしたの？舞？ひょっとしてお祭り、みんなでいくの嫌？」
「あ、いや、そうじゃないけど…」

しばしの沈黙。

そして舞が口を開いた。
「…ねぇ、美來。」
「ん？なに？」
「私達、この5人はずっと　友達だよね？」

突然の質問に戸惑った。
だけど、答えはすぐに浮かんだ。
「もちろん！！ずーっとこのメンバーでおもしろおかしくやってくんだから！」
「…そっか。ありがと。」

舞の表情が少しだけ緩んだ気がした。

…にしてもなんだろう。

こんな質問、初めてじゃないような……。

“believe” part 3（前書き）

あぅ〜〜〜（ノД＞。）゜。

8月中に更新したかった〜。

テスト勉強やらなにやらが詰まって…。
→言い訳すんな（殺）

“believe” part 3

――薔薇祭前日――

「先生〜明日の準備ですか〜？」
「出たな、かしまし五人娘。」
「先生、若干古いです！あと妖怪みたいに言わないで下さい！」
「ったく…いつも5月なのになんでこんな暑っついんだよ…」
ちなみに、先生は会場準備の係だ。
「だいたいよォ、露店の並び順なんて適当でよくね〜？」
だめだこの人…完全にアンニュイモードに入ってる…。
「も〜。私達も楽しみにしてるんだからちゃんとやってよ〜。」

突如、
背後から明瞭な女性の声が聞こえた。
「わわわっ誰〜」
「やだな〜も〜。私だよ。わ・た・し！」

はい、失礼しまーす。作者でーす。
さっきの声の人は『霜月璃珠』（しもつきりじゅ）といってこの学園のOGです。年齢は18歳です。どうやら舞と何か関係があるらしい…。今の時点では謎の人です（笑）

失礼しましたー。

「てめー…。この忙しい時に何しに来たんだよ…。」「露店の並び

順に文句つけに来ました☆」
「帰れェェェ！！」

…とまぁこんな感じの先生と璃珠とのやりとりが毎年あるんだけど…。
「それにしても、美來達なんかかなり大きくなったね〜。」
「えへへ…。そう？」
「でも何年たっても頭だけは成長しないのがこの美來というお馬鹿さん☆」

そう言って夏花が私の頭をつつく。
「ちょっとそれどういう意味ー！？」
と、ふざけあう夏花と美來。それをおさえようとする梨菜。さらにその横で寝てる朱里香。
そんなカオス的空間を舞は微笑みながら傍観していた。すると璃珠が話し掛けてきた。
「……『久しぶり』ね、舞。」
「……うん。『久しぶり』だね、璃珠。」

少しの間だが、沈黙が流れた。

その間にふざけあいはいつの間にか私と梨菜の立場が逆となって今度は私が二人をおさえる立場になっている。

そんな時、こんな会話が聞こえてきた。
「…今年も起こるかしら、『女神ローズの呪い』」

……え？

『女神ローズの呪い』？

どうやら他のみんなには聞こえてないらしい。

何、それ…。

しかも今年『も』って言ってたよね…。

私、知らない…。

不意に、

璃珠が私の方を向いて手招きしてきた。

私はそれについていく。

舞は、ついてこなかった。

しばらくすると、「栄凜の森　」についた。

そこで璃珠が口を開いた。
「…さっきの反応から察するともしかして、話聞こえた？」
私はコクリ、と頷いた。

「…ねぇ、璃珠。『女神ローズの呪い』って何なの？私聞いたことないよ？」
「…まぁ学園内でも知ってる人はごくわずからしいだからね…。」
「内容は？」
「えっと…毎年薔薇祭の翌日に学園の生徒、または卒業生、職員から1人選ばれて、『呪われる』」
「…『呪われる』って、どうやって…？」
「…………殺される」
「！！」
「…もう8年目になるわね…。」

衝撃だった。
今までの楽しい祭の裏でそんな事件があったなんて。

しばらく言葉を失った。

そんな空気を突き破るように梨菜達がやってきた。
「あっれー。美來達こんなところで何してんのー？」「ちょっと探しちゃったよ〜。」
「そろそろ帰るぞ。眠い。」
「おめーは寝てばっかかよ！！」

・・・
「じゃあ私、そろそろ帰るね。じゃーねみんな、薔薇祭でね！」
そう言って、璃珠は帰っていった。

しばらく寮内を歩いて、夏花達と別れて私と梨菜の二人だけになった。
「…ねぇ、梨菜は知ってる？」

「何を？」
「女神ローズの呪いのこ「知らない。」

私の返答を待たない即答だった。

「てゆうかそんな話、誰から聞いたの？」

なに・・・？
今までの梨菜と全然違う・・・。

見るものを畏縮させるような冷酷な目。

さっきまでとまるで別人…。
一言で言えば、怖い。

「ねえ、誰から？」

私は返答を求められている途中だと気付く。

「りっ…璃珠から…。」
「ふーん…。」

・・・・・

沈黙。

梨菜が口を開いた。
「あっ！そろそろ私お風呂の時間だから急がないと！行こっ！」
「あっ…待って…！」
「ほら早くー！」

梨菜はいつもの梨菜に戻っていた。
さっきのは…何だったんだろ…。

・・・・

ま、いっか☆
そう思って、梨菜の後をついていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9326k/

RosyTime

2010年10月12日03時29分発行